◆１	【麤】く斫られたる石にも神の定めたる運あり	あら
	【糱】を栽培して商う	もやし
	【一纏】めにしておいたので安心しなさい	ひとまと
	【鵜篝】が川面に映える	うかがり
	【襖】に衣を重ねても逃がすべきに非ず	あお
	【乙丑】には五十六歳になっていた	きのとうし
	【解】れを整えてやおら振り向いた	ほつ
	【乾涸】びた喉を潤す	ひから
	【砧】打って我に聞かせよや坊が妻	きぬた
	【逆捩】を食わせる	さかねじ
	【襟刳】りの汚れは目立つ	えりぐ
	【己巳】の日は弁才天の縁日である	つちのとみ
	【庚戌】の歳、旅舎に休う	かのえいぬ
	【首縊】りの足を引く	くびくく
	【醜】の益荒男なお恋いにけり	しこ
	【縦】に心を自然の中に遊ばせる	ほしいまま
	【縦】んば雨でも心配はない	よし
	【熟】み柿が熟柿を弔う	う
	【出涸】らしのお茶を飲む	でが
	【樟】は虫害に強く建築家具材に用いる	くすのき／くす
	【蒸】かしたての甘藷を二本やった	ふ
	【尻紮】げして一散に逃げた	しりから
	【辛酉】の年に皇位に即く	かのととり
	【壬戌】の年血腥い事件が続発した	みずのえいぬ
	【甚】く感服された御様子である	いた
	【尽】れた晩秋の野に佇む	すが
	【雛霰】を買ってきた	ひなあられ
	【裾捌】きの音とともに家元が現れる	すそさば
	【節榑】を使って小屋を作る	ふしくれ
	【岨道】を足にまかせて追っかける	そばみち／そわみち

【燥】ぎすぎの気味がある	はしゃ
【陳】ねて後矯めんとすれば枝折れ枯れ凋む	ひ
【椴松】の自生状態を調査する	とどまつ
【熱】り立って不満をぶつけた	いき
【戊午】の年に居を隣国に移した	つちのえうま
【偖】夕餉は何にいたしましょうか	さて
【刳】り貫きの菓子皿に盛る	く
【嗄】れた声でゆっくり語った	か／しわが
【嘸】大変であったろう	さぞ
【嚏】る時は則ち人の我を道う	はなひ
【埃】がたちこめている	ほこり
【悴】む手を擦り合わせる	かじか
【愁】情けをかけるのは良くない	なまじ／なまじい
【撓垂】るる柳はほそき目もとかな	しなだ
【暈】のかかった春の夜の月を眺める	かさ
【朮】を焚く匂いが漂ってくる	おけら／うけら
【楮】の繊維は紙の原料となる	こうぞ
【榻】の端書きも九十九夜を迎えた	しじ
【榧】の木に観世音菩薩を彫る	かや
【櫂】は三年櫓は三月	かい
【毬栗】も内から割れる	いがぐり
【澪筋】を伝って舟を進めた	みおすじ
【甍】破れて霧不断の香を焚く	いらか
【甕】に一房の藤をさす	かめ／もたい／みか
【疚】しいところがあるらしい	やま
【痞】えに悩む上膓を思わせる	つか
【瘧】が落ちたように呼び鈴に応じた	おこり
【癸亥】の歳に上洛した	みずのとい
【睨】むように天を見上げた	にら
【礑】と思い当たった	はた／はった

【笊】で水を汲む	ざる
【筬】の音が響く山村を訪れた	おさ
【箙】に梅枝を指した風流を見とがめる	えびら
【篝火】であたりを照らす	かがりび
【篩】った黄粉を餅に付ける	ふる
【籬】に耳、壁の話する世の中	まがき／ませがき
【粳】を常食の米とする	うるち／うる
【蓼酢】でもいけぬ奴	たです／たでず
【薺】花咲く垣根かな	なずな
【薺粥】を啜り邪気をはらう	なずながゆ
【蝗】の大群が発生した	いなご
【袒】姿の童女が現れた	あこめ
【褻】にも晴れにも歌一首	け
【謗】れば影指す	そし
【貂】なき森の鼬	てん
【踝】を強く打った	くるぶし／かかと／くびす
【踵】を接して来る	くびす／きびす
【躪】り書きの置き手紙を読んだ	にじ
【轅】を北にして楚にゆく	ながえ
【遉】に横綱の相撲は見応えがあった	さすが
【鄙】びた一軒家に辿り着く	ひな
【鉋屑】へ火が付いたように喋る	かんなくず
【鋺】に欠き氷を盛る	かなまり／まり
【鏥】銭を選ぶ	びた
【霤】は三途の川	あまだれ
【饐】えた臭気が鼻を突く	す
【髻】を切って聖に随った	もとどり／たぶさ
【鬆】が立った飯は食われぬ	す
【鮠】の群れが涼しげに川底を行き来した	はや／はえ
【鯔背】な法被姿で練り歩く	いなせ

【鱶】ほど寝る	ふか
【鸛】は高木の樹頂に営巣する	こうのとり
【麩】を飼料にする	ふすま
あしひきの山橘を【苞】に摘み来な	つと
いささか【訝】しい点がある	いぶか
いたり飲めば【輒】ち尽くす	すなわ
かなり【踵】の高い靴をはいている	かかと
ことづてもなく【宛】ら春になりぬ	さなが
しきりに隠元豆を【拷】っている	むし
すでに【蛻】の殻だった	もぬけ
その後【恙】なくお過ごしでしょうか	つつが
その処断を【肯】わぬ蒙昧な人々	うべな
その場の誰もが口を【噤】んでいた	つぐ
それは【夥】しく存在する	おびただ
それは【迚】もできない	とて
それは濃緑の葉の間に【赫】いていた	かがや
それも【序】でに言って置く	つい
それを言っては【縺】れてしまう	もつ
とらつぐみを【鵺】ともいう	ぬえ
どうやら【秕】ばっかし摑まされたらしい	しいな
なかなか【強】かな人物である	したた
はて【扨】運の甲斐ない男だ	さて
ひどく打ち【萎】れた様子だ	しお
まことに【忝】く存じます	かたじけな
もみじ葉は風の【被】くる錦なりけり	かず
もらうものなら【藜】でも	あかざ
ゆかしさよ【樒】花咲く雨の中	しきみ
よく【鞣】してある菖蒲色の革紐	なめ
わざと要点を【暈】して話した	ぼか
ミネルヴァの【梟】は知恵の象徴とされる	ふくろう

悪魔主義と【看做】されている	みな
葦辺に舟が【舫】ってある	もや
胃が【凭】れて困る	もた
医師の忠告を【肯】じなかった	がえん
井戸茶碗の【鰄】に見処があった	かいらぎ
一気に気勢を【削】がれてしまう	そ
一向に【梲】があがらない	うだつ／うだち
一点一画【苟】もせず	いやしく
一匹の【鰆】を以てもてなさん	さわら
越鳥南枝に巣くい、胡馬北風に【嘶】く	いなな
縁が綺麗に【縢】ってある	かが
遠くなった耳で聞き、【翳】んだ目で見る	かす
遠くの方から【鬨】の声が聞こえてきた	とき
遠山を【銜】み長江を呑む	ふく
塩を【撮】んで火に入れる	つま
往く者には必ず【贐】を以てす	はなむけ
王子は【窶】れた姿で帰還した	やつ
恩師の前を【憚】らず反対論を唱える	はばか
何と【論】われても平然としている	あげつら
嫁と【廁】は遠いほどよい	かわや
果を【擲】ち車に満つ	なげう
火にあぶられて【燻】し銀の色に変じた	いぶ
火を乞うは、【燧】を取るに若かず	ひうち
火事場に【纏】を持って消し口に立つ	まとい
禍福は【糾】える縄の如し	あざな
荷花落日、紅【酣】なり	たけなわ
貨【悖】りて入る者はまた悖りて出づ	もと
我が期を【愆】らんとするにはあらず	あやま
我が身を【抓】って人の痛さを知れ	つね
我ひとりの手柄と【嘯】く	うそぶ

会の結成を【懌】ぶ	よろこ
会員たちは【一齣】議論を交わした	ひとくさり
怪獣は目が覚めると【鬣】を転じて出て行った	たてがみ
海で採った海苔を【漉】く	す
外国で【屢】見る庭園のようだ	しばしば
柿の実を【啄】みに小鳥たちがやってくる	ついば
柿の葉に毛虫が【蠢】いている	うごめ／おごめ
角落としに荒目の【鑢】を使う	やすり
学校での【苛】めが問題となっている	いじ
学問する人はまず【謙】るを以て基とすべし	へりくだ
寒風の中を【跼】って歩く	せぐくま／せくぐま
勧学院の雀は蒙求を【囀】る	さえず
完き【黙】しを以て雄弁に法を説く	もだ
干潟で【蟶貝】を採る	まてがい
患えは【忽】せにするところより生ず	ゆるが
眼を【瞋】らして飛び込んで来た	いか
危うく身を【躱】した	かわ
奇を【衒】った言動だ	てら
幾箇所かの【件】は想い出すことができる	くだり／くだん
機の【梭】の形に創意が窺われる	ひ
汽笛が朝靄を【劈】く	つんざ／さ
記憶が【褪】せる	あ
急ぎ聚落へ【罷】り上る	まか
急に【転】と後ろを振り向いた	くるり
旧弊に【泥】まぬよう注意する	なず
挙国一致して軍事に【力瘤】を入れる	ちからこぶ
京洛の春も【闌】の頃	たけなわ
業を煮やして罎の蓋を【抉】じ開けた	こ
襟首に兜の【錣】ずれの痕がある	しころ
謹んで新年を【寿】ぐ	ことほ

金が尽き【搗】てて加えて病を得た	か
金魚の【鰓】呼吸の様子を観察する	えら
九齢に【垂】としてただ梨と栗とをもとむ	なんなん
具縛の凡衆を【誑】かす	たぶら
靴を隔てて【痒】きを掻く	かゆ
群れの【鮖】で夥しく沖が光る	はまち
兄弟牆に【鬩】げども外其の務りを禦ぐ	せめ
継ぎ【接】ぎだらけの襤褸を纏う	は
結婚を【甲子】の歳に執り行う	きのえね
月と【鼈】、提灯に釣り鐘	すっぽん
月夜に背中【炙】る	あぶ
犬の子が追うて行くなり【雪礫】	ゆきつぶて
己を衒わず、他を【貶】めず	おとし
故郷の風景は一層【懶】く見えた	ものう／ものぐさ
胡麻は【囮】の鳥の餌用である	おとり
虎豹【豈】犬羊の欺きを受けんや	あに
五月雨に我は蓑着て【粽】哉	ちまき
互いに【鎬】をけずって戦う	しのぎ
後生畏るべし、来者【誣】い難し	し
御主はちと【諄】いのではないか	くど
光【清】かにして宛も東瀛を鎮するに似たり	さや
光を【漲】らせた蒼い空	みなぎ
光清かにして、【宛】も東瀛を鎮するに似たり	あたか
口で【貶】して心で褒める	けな
好きには身を【窶】す	やつ
好けば痘痕も【靨】と見ゆ	えくぼ
工事は【概】ね完了した	おおむ
恒例の【鞴】祭りがあった	ふいご／ふいごう
皇子は【縊】れて果てた	くび
荒砥で【刃毀】れを直す	はこぼ

黒い鬣を【梳】かす	と／す
今後の研究に【俟】つ	ま
今後の生活を【熟】と思案する	つくづく／つらつら
歳暮の町に【餅搗】きの音が響き渡る	もちつ／もちづ
細長い鼻つきをした【瓜実顔】の輪郭であった	うりざねがお
財に臨みて苟も得る【毌】れ	なか
作法について【諄諄】と説明する	くどくど
山路の【櫨】の木が色づいてきた	はぜ
蚕が【蔟】で繭を作る	まぶし
四十を【疾】うに越している年齢であった	と
子は【罕】に利を言う	まれ
指を【銜】えて待っている	くわ
枝も【撓】わに積もった雪	たわ
紙子着て川へ【嵌】まる	は
紫陽花の【縹色】が寺門に映える	はなだいろ
脂に画き氷に【鏤】むるがごとし	ちりば
至治の国、君は【桴】の若く、臣は鼓の若し	ばち
事が延びれば【尾鰭】が付く	おひれ
持ち前の冒険心が【滾】ってきた	たぎ
自責の念に【苛】まれる	さいな
自責の念は【夜毎】自らを蝕んだ	よごと
自然淘汰の【篩】に掛けられる	ふるい
鹿の【韋】の鞄を誂える	なめしがわ
七年の病に三年の【艾】を求める	もぐさ
七輪に火を【熾】す	おこ
嫉妬心を【露】にする	あらわ
煮汁を【漉】して鍋に移す	こ
車【擡】げよ、火かかげよ	もた／もちあ
借る時の地蔵顔、【済】す時の閻魔顔	な
手に【幾緡】かの銭を握らせた	いくさし

手管を弄して老中を【誑】し込む	たら
手助けをするに【吝】かでない	やぶさ
朱塗りの【櫃】に経を蔵めてある	ひつ／はこ
酒の香りに【噎】んだ	むせ
酒の肴に【鯣】をあぶる	するめ
酒を【呷】るように飲む	あお
樹樹を【嬲】る嵐が紅葉を散らした	なぶ
秋【鮴】は嫁に食わすな	かます
十五日の三毬杖に【囃】を唱える	はやし
宿直して迎え【侍】りぬ君が春	はべ
熟したる【橙】の如き頬の色	だいだい
暑さの【砌】お変わりありませんか	みぎり
書のために【蠹】を憂える	しみ
女房たちは【樗】の唐衣で出仕した	おうち
宵のうちに【霙】はあがった	みぞれ
小樽の海に【鰊】の大群が押し寄せる	にしん
小包をひもで【紮】げる	から
少年の心を【弥】が上にも刺戟した	いや
松江の鱸を【鱠】にして賞味する	なます
樵は曲げ木の【權】をつけて山に入った	かんじき
賞讃の声を【吝】しむものではない	お
上下【交】利をとりて国危うし	こもごも
場末の往来はひどく【濘】っていた	ぬか
心に【蟠】りがあり執筆が捗らない	わだかま
心の【掟】正しく修する	おきて
新人というには些か【薹】が立っている	とう
新知に培養【転】た深沈たり	うた
真の黄金は【鍍】せず	めっき
真の武士は死に【阿】るを以て怯懦なりとしたり	おもね
神社の参道に【幟】が林立している	のぼり

神饌の【粢】を調える	しとぎ
臣、弱才を以て【叨】に非拠を窃む	みだり
親子三代、殿に【傅】き仕えた	かしず
身綺麗な【大髻】の若衆が同道した	おおたぶさ
進退谷まって自ら【刎】ねる	は／くびは
人々の膏血を【浚】う	さら
人の【褌】で相撲を取る	ふんどし
人を【蔑】するにも程がある	なみ
水田の底に【蜷】の這った迹が見える	にな
世に寄すること【将】幾何ぞ	はた
清旦、方に案に【堆】し	うずたか
生活の記述を【蔑】ろにする	ないがし
盛栄一場の世を【儚】む	はかな
西瓜の種を【齧】っている	かじ
西陲の戍客、金革を【褥】とす	しとね
青鷺の【番】いわたるやきょうの月	つが
青大将が【塒】を巻いている	とぐろ
昔【葎】が生い茂っていた	むぐら
石に【跌】く	つまず
石畳の上に【踞】る	うずくま
折り目正しく【着熟】した	きこな
先輩に【肖】って外遊した	あやか
煽てと【畚】には乗りやすい	もっこ
船は【纜】を解き、岸を離れた	ともづな
全く【噯】にも出さなかった	おくび
組んず【解】れつの大挌闘	ほぐ
組織に【罅割】れが生じている	ひびわ
相手から小胆と【見縊】られている	みくび
袖口の綻びを【絎】ける	く
其の声尖く【咽】び梭を鳴らすが如し	むせ

体は尋常の【犢】よりも大きい	こうし
耐えがたい【癢】さに襲われた	かゆ
怠けて終日炬燵に【燻】ぶっていた	くす／ふす
代々【髢屋】を生業としている	かもじや
大きな【椈】の純林がある	ぶな
大きな【鼾】だ	いびき
大きな困難が【開】かっている	はだ
大概の事なら目を【瞑】ろう	つぶ／つむ
大向こうを【唸】らせる演技だ	うな
鷹居眠るとき鳥雀【喧】し	かまびす／やかま
啄木鳥の子は卵から【頷】く	うなず
沢の流れで米を【精】げる	しら
壇上に向かって熾んに【捲】し立てた	まく
地獄の羅刹に【魘】される	うな
恥ずかしげに扇を【翳】す	かざ
中たらずと【雖】も遠からず	いえど
忠臣は其の君に【諂】わず	へつら
長葱を土に【埋】けて保存する	い
庭に大きな【棗】の木がある	なつめ
敵の荒肝を【拉】いでみせよう	ひし／ひしゃ
笛のような美しい声で【鷽】が囀る	うそ
天を恨みず人を【咎】めず	とが
都大路を【直】走る	ひた
冬の宿阿寒の【毬藻】のみ青く	まりも
唐詩数首を【諷】んじる	そら
東屋の中で煙草を【燻】らしていた	くゆ
藤蔓を【箍】とした桶を使っていた	たが
豆腐に【鎹】	かすがい
頭蓬たりて【梳】るに暇あらず	くしけず
頭領としての【弁】えがある	わきま

堂奥に御神体が【祀】ってある	まつ
道具箱から【鏝】を取り出す	こて
独活を【饅】にして一献ふるまう	ぬた
南瓜の葉や茎が【萎】びている	しな
二十歳は【丁未】の歳となる	ひのとひつじ
二人の足音が【研】するばかりでした	こだま
肉を串に刺して【榾火】で焼く	ほたび／ほだび
日がな一日苧を【績】む	う
日常生活の【一齣】を描く	ひとこま
熱烈な意気が彼女の心を【撼】かした	うご
濃密の花の香りに【噎】せる	む
梅は食うとも【核】食うな	さね
白日放歌【須】らく酒を縦にすべし	すべか
白布を川の流れに【酬】す	さわ
反発と憎悪を【綯】い交ぜにして睨んだ	な
彼の不心得を諫め【窘】めた	たしな
彼は名立たる棟梁の【悴】である	せがれ
秘伝の【釉】を調える	うわぐすり
秘仏を【丙寅】の年のみ開帳する	ひのえとら
浜辺で漁網を【結】く	す
不賛成の意を【仄】めかす	ほの
楓に【鶸色】の若葉が萌え出た	ひわいろ
風が強いので【蔀】を下ろさせた	しとみ
風に草木が【靡】く	なび
風呂敷の隅を【抓】んで丁寧に折る	つま／つ
払子の毛先を【剪】み切る	はさ
物を見る度に軽く眉を【皺】めている	しわ
文中、人の心を【擽】るものがあった	くすぐ
兵を起こし城を【屠】る	ほふ
兵馬を【小倅】などと侮っている	こせがれ

平生の【身嗜】みに無関心である	みだしな
柄も折れよ刃も砕けよと【抉】る	えぐ
米【搗】つ男等、恐れ惑いて蹲る	か
米を【舂】きながら思考する	つ／うすづ
墓木【已】に拱す	すで
蓬萊曲【将】に稿を脱せんとす	まさ
鱒専用の【筌】を仕掛ける	うえ
明日香の風が【采女】の袖を吹き返す	うねめ
銘木の槐を【床框】に使用している	とこがまち
鳴り物入りで【囃】す	はや
木の下に汁も【膾】も桜かな	なます
木を伐って【桴】に編む	いかだ
黙って【俯】いていた	うつむ
門に入りて【諱】を問う	いみな
夜の【帳】が落ちかかる	とばり
薬と鍼灸を用うるは、【已】む事を得ざる下策なり	や
油をしぼった残り【滓】だ	かす
友の便りには真情が【迸】っていた	ほとばし
夕顔が【仄仄】と咲いていた	ほのぼの
予想外の事態に【目眩】くような思いだ	めくるめ
幼気盛りの笑顔が【眩】しい	まぶ
幼児をなだめ【賺】す	すか
洋書に【栞】を挟む	しおり
慾に目が【眩】れて家産を蕩尽する	く
来年の干支は【辛巳】である	かのとみ
里人は神隠しだ【人攫】いだと噂した	ひとさら
竜躍りて淵に在り、五雲【裹】む	つつ
竜鱗に【攀】じ鳳翼に附す	よ
良き絵師といえども丹の色に【咎】あり	とが
良驥の足を【絆】し責む	ほだ

鱗を【刮】げてから筒切りにした	こそ
烈士は営みを【苟】にせず	かりそめ
蓮の花が【萼】を動かして香気を漂わす	うてな／はなぶさ
老大家に褒められて【脂下】がっている	やにさ
腕に【縒】りを掛けて料理する	よ
腕を【拱】きて大会に対す	こまぬ／こまね
咄嗟に【前褌】を取った	まえみつ
囮捜査で犯人を【誘】き出した	おび
寇に兵を藉して、盗に糧を【齎】す	もたら
揣摩臆測を【逞】しくする	たくま
檜の薄板を【綰】ねて円筒形の器を作る	わが
梟の【塒】を探しあてた	ねぐら／とや
罠【拵】えて首突っ込む	こしら
羝羊、【藩】に触れて進退谷まる	まがき
膠に浸した牛革を金槌で【撓】める	いた
臘梅の花が【萎】んでいた	しぼ
舳先から鯱に【銛】を射込む	もり
錺職は幾種類もの【鏨】を使う	たがね
髀肉の嘆を【喞】つ	かこ
鷁舟乍ち動き、朱鷺【徐】に鳴く	おもむろ
◆２ 麤く【斫】られたる石にも神の定めたる運あり	き
【鶪】が枯れ枝で鋭く鳴いた	もず
【鼴】が石につかえたように捗らない	もぐら／もぐらもち
【蘖】が風雨に耐えて成長を続けた	ひこばえ
【皺】すべからざる神域ならん	けが
【鱟】の生態を調査した	かぶとがに
【萁】を燃やして煮炊きをする	まめがら
【一坏】の濁れる酒を飲むべくあるらし	ひとつき
【允】に厥の中を執る	まこと
【咽】を揚して背を拊つ	のど

【簡】ぶは帝の心に在り	えら
【稽】うる無きの言は聴くこと勿れ	かんが
【疾】しさの念を払拭できない	やま
【嘗】みにこれが為に巨鍾を撞く	こころ
【窃】かに隣国に入り込んだ	ひそ
【粗栲】の衣を身に纏っている	あらたえ
【朝餉】の間に上はおわします	あさがれい
【肉醤】の作り方を教わる	ししびしお
【梅醤】の作り方を伝授される	うめびしお
【薄穢】い笑い方をする	うすぎたな
【備】に遺留品を調査した	つぶさ
【面宴】れした頬に微笑を浮かべていた	おもやつ
【佯】りて北ぐるは従うなかれ	いつわ
【倩】、事件の経緯を考えてみた	つらつら
【儻】いは其の二心有らんことを恐る	ある
【儻】し他意有らば、難たること小ならず	も
【吝】い所へ皺がよる	しわ
【嗔】れる拳も笑う面は打たず	いか
【嗷】しい脣吻の音をもって絃歌講誦の声を擾す	かまびす
【嘴太鴉】の駆除が計画された	はしぶとがらす
【噫】斗筲の人、何ぞ算うるに足らん	ああ
【嚮】に催された展覧会が物議を醸した	さき
【囈】のように経文を唱える	うわごと／たわごと
【堋】に据えた的を射る	あずち
【壜】のまま冷蔵庫に入れよ	びん
【孅】なる身に仮初め事も仮初めならず	かよわ
【寔】に寛仁大度の人物である	まこと
【悋】かなれば人離るべし	やぶさ
【愆】ちを繰り返したのを悔いた	あやま
【憔】れが目立つが品位を失わない	やつ

【扠】を構えて水面を見つめる	やす
【捩摺】りの名残とて方二間の石あり	もじず
【撓】の見本のような蕉風の句である	しおり
【曩】に話したことは確かなことです	さき
【柬】んで別に取り分く	えら
【楹】を鑿ちて書を納む	はしら
【楝】は夏に用いる襲の色目の一つである	おうち
【槊】を横たえて詩を賦す	ほこ
【榱】の年輪測定により建築年代が判明した	たるき
【檐端】の荻が風に揺れる	のきば
【檠】を用いて強弓を調える	ゆだめ
【櫺窓】から曙光が射し込む	れんじまど
【殃】いは池の魚にまで及ぶ	わざわ
【滾】つ瀬に紛れ現れ秋の蝶	たぎ
【澹】き恋慕の情を抱けり	あわ
【燠】かなれば則ち趨く	あたた
【爰】に梅の花が咲いている	ここ
【猝】かに廃太子となった	にわ
【猥】りに大臣の邸を歴訪した	みだ
【秣場】で一汗流した	まぐさば
【窶】しくして葬る能わず	まず
【筵旗】を立てて嗷訴に及ぶ	むしろばた
【籌】を帷幄の中に運らす	はかりごと
【粤】に起ちて自ら之を見る	ここ
【糅】てて交ぜての難儀を蒙る	か
【糒】と醪酒をたずさえる	ほしいい／かれいい／ほしい
【絮】い話なので聞き流す	くど
【纔】かに人を通せるのみ	わず
【耜】の手入れを怠らない	すき
【聊】かこれで責任を果たした	いささ

【肆】は軒を争い、幌は風に翻る	みせ
【腥】い風が吹いて来る	なまぐさ
【膰】とて神供の直会（なおらい）を群臣に頒かち賜う	ひもろぎ
【莨】にするにはまだ早い	たばこ
【菘】は春の七草の一つである	すずな
【萍】の生活を余儀なくされる	うきくさ
【謾】いて二代目を名乗る	あざむ
【贏】ち得たり青楼薄倖の名	か
【蹌】くような足どりだった	よろめ
【迥】かに翠黛を望む	はる
【遐】きに陟るに必ず邇きよりす	とお
【霍】かに消え失せて影も形もない	にわ
【霾】る中を夕日が没する	つちふ
【颶】が庭の木の葉を舞い上げた	つむじかぜ
【餽】るに砂金一封を以てす	おく
【饑神】に取り憑かれたらしい	ひだるがみ
【饒】かに雅味を帯びている	ゆた
【鬮】に当たった者が役に就いた	くじ
【鯢】の多くは沼沢に棲息する	さんしょううお
【鯡】の群れが海の色を変えた	にしん
【鰮】の群れが海の色を変ずる	いわし
ああ人【譁】しくすること無く命を聴け	かまびす／やかま
あけて出て入る所【閉】てぬ人いと憎し	た
あしひきの野行き山行き【潦】川行き渡る	にわたずみ
この件が二人を結びつける【紲】になった	きずな
これで【鳧】がついた	けり
さかしまに【頤】わるるも吉なり	やしな
その大宝を【嗇】しみ、その陳を棄つ	お
その徳天の如し、【盍】ぞ石室に蔵さざらんや	なん
それ【逋】れ逃げ、その国に帰る	のが

それよりは【霎】し牙を磨こう	しば
それを【糺】すのもはばかられる	ただ
たくみな用兵により【亟】隣国を破った	しばしば
ただ【片才】を聞き伝えて心を動かす	かたかど
とめどなく財貨を【饕】る	むさぼ
どうにも気が【餒】えてならぬ	う
なんぞ【啻】に走るのみならんや	ただ
ひとり【狐憑】きのような顔をしていた	きつねつ
またぞろ蕩心が【熾】んになる	さか
やおら【著】を手に取った	めどぎ／めどはぎ
わざと【恍】けてずるを極める	とぼ
悪政は世の条理を【紊】れさせる	みだ
宛も天地の如くに君を【憑】んでいた	たの
或いは【黜】け或いは放つ	しりぞ
或いは巾車に命じ、或いは孤舟に【棹】す	さおさ
或いは合いて隠れ、或いは【乖】きて顕る	そむ
安静を切に【幾】う	こいねが
以て不享を征するに諸侯【咸】く服せり	ことごと
伊弉諾尊乃ち大樹に向かって【溺】まる	ゆばり／いばり
夷を【攘】う騎馬車が西を目指した	はら
異国の風に【傚】う	なら
衣【嫺】やかに曳き耳目を娯します	みやび
一善自ら千災を【禳】うに足る	はら
一鼎の銅を【爍】かして、以て一銭の形に灌す	と
一日再び【晨】なり難し	あした
一頻り続いた【哢】りが止んだ	さえず
一面に【杉蘚】が生えていた	すぎごけ
一里四方に亘って【柞原】が広がる	ははそはら
茨の芽【野鶲】きたりかくれける	のびたき
員外の帥に【貶】とされて都を離れた	お

引き取って【恤】れみ育てた	あわ
飲食を【菲】くして孝を鬼神に致す	うす
雨を冒して韮を【翦】る	き
云い知れぬ恐怖に息を【嚥】んで身を竦める	の
運あしくして躬【蹙】まりなば天を恨む	きわ
雲は陽を【濾】す	こ
雲間の曙光が【眩】いまでに赫いていた	まばゆ
鋭く撓められた竹の【櫂先】	かいさき
宴果てて【良】久しくなりぬ	やや
燕燕【于】に飛び其の羽を差池す	ここ
汚い詞で王を【誚】めた	せ
横腹の痛くなるまで笑い【転】ける	こ
王の遺徳を称え【誄】を奉った	しのびごと
翁七十二に垂として【渾】て少時の如し	すべ
何か【攫】んだようだ	つか
何かにつけて【衒】らかしている	ひけ
嘉卉の甚だ【夥】きにや	おお
家眷【偕】に先妣の墓所に参る	とも
花を植うれば以て蝶を【邀】うべし	むか
荷暴を禁じて今に【訖】る	いた
過去のみを礼讃して現代を【詛】う	のろ
我を【屑】しとして、もちいず	いさぎよ
我を【謫】むる者少なからず	せ
雅な【玉櫛笥】を拝領した	たまくしげ
皆悉く筋【嬾】く骨弛む	ものう
街上の土の色は【殷】んに赤なり	さか
各各持する所有り、故に【乖】り合せず	もと
各各修業を【醇】らにせよ	もっぱ
核心を【刳】る意見が飛び出した	えぐ
学を以て愚を【愈】やす	い

楽しげに【哂】う	わら／あざわら
茅茨翦らず采椽【刮】らず	けず
漢王、食を【輟】め哺を吐く	や／とど
関市の征を【苛】しくして、以てその事を難くす	きび
岩肌を【摸】りハーケンを打ち込む	さぐ
気【霽】れて風新柳の髪を梳る	は
記憶の中の娘の姿は【璞】のままだ	あらたま
起こりを【糾】せば私の所業だ	ただ
亀を投じて天を【詬】めて呼ぶ	はずかし
宜しく【亟】やかに出で来たるべし	すみ
戯謔能く人の【頤】を解く	おとがい
客僧に速答を【拶】られた	せま
弓弭の【調】を献上する	みつぎ
旧貫に【仍】らば之をいかんせん	よ
巨大な【垤】が点在する	ありづか
虚に【馮】り風に御す	よ
魚戯れて【荷】は動く	はす
京中大いに驚き城邑併しながら【囂】し	かまびす／やかま
強弓は【鏑】を貫き通した	しころ
曲【訖】われば更に曲を呈す	お
極まって【爨】ぐ前に薪を量る	かし
玉を以て鳥に【抛】つ	なげう
衿を【斂】めて将に拝せんとす	おさ
近い火で手を【焙】れ	あぶ
金銀【汞】の三礦を産出する	みずがね
九天星辰を【輾】らす	めぐ
遇することの冷なるが為に身を室隅に【躱】けた	さ
屈強の者二人に【轎】を舁かせる	かご／やまかご
繰り返し指を【僂】めて確かめる	かが
君子の才華は、玉【韞】め玉蔵すが如くすべし	おさ

君子は其の【睹】ざる所に戒慎す	み
君子は文を【秉】る	と
君主安泰、民心【渝】わるところなし	か
君臣相顧みて尽く衣を【沾】す	うるお
群星光甚を争い【夐】かに濤声を聞く	はる
軍【紮】まれば幽邃も殺伐と化す	とど
軍功により大佐に【躋】った	のぼ
軍師を遣わし【冢】を修む	つか
兄嫁と【諧】らぎ暮らした	やわ
激雷の【驟】かに震うが如し	にわ
月に一鶏を【攘】み以て来年を待つ	ぬす
月に一度、墓前に【莅】む姿が見られた	のぞ
嫌悪と疑惑との【蹙】め顔となる	しか
見事な【阿亀】の面	おかめ
険隘に局せられ、禍難身に【薄】る	せま
顕を微にして幽を【闡】く	ひら
幻の逸品を【覓】める	もと
言っていることは【洵】にもっともだ	まこと
言霊の八十の【衢】に夕占（ゆうけ）問う	ちまた
個人の愛でた梅花に涙を【濺】ぐ	そそ
古学に【精】しく通達する	くわ
孤魂を想うて旧宇を【眷】みる	かえり
己をもって人を【揣】る	はか／おしはか
故に【姑】くこれを挙げておく	しばら
故旧わすれざれば、則ち民【偸】からず	うす
湖上に魚を【鬻】がず	ひさ
虎豹の文は【田】りを来す	か
吾これを【售】り人これを取る	う
吾少くして学問を【懶】る	おこた
後のことを【恤】えるひまはないはずだ	うれ

公室を強め私門を【杜】ず	と
好事家が逸品を【餮】り見ている	むさぼ
巧みに【找】し難場を凌ぐ	さおさ
広くて【邃】い館に招じ入れられた	おくぶか／ふか
恒来第に【造】りて当主と議論す	いた
洪水、天に【滔】って禹の績あり	はびこ
甲を巻き旗を【韜】む	つつ
甲板に出て欄干に【凭】った	よ
行くときは【閾】を履まず	しきい／しきみ
香を焚いて【穢】れを祓う	けが
高を括って【空嘯】いていた	そらうそぶ
高価な牛を【恪】しんで廉価の羊と易えよ	お
高閣の簷瓦吹かれて空に【飄】る	ひるがえ
国として【泯】びざるはなし	ほろ
国を敗り民を【殄】くす	つ
国財を【蠹】む官人が蔓延る	むしば
鵠を刻して成らざるも尚【鶩】に類す	あひる
忽ちオペラの【俘】となった	とりこ
忽然として行方を【眩】ました	くら
此を懲らして彼を【警】む	いまし
今【暴】かに大名を得るは不祥なり	にわ
今諸君将に【妄】りに誅せんとす	みだ
魂は去りて【尸】は長く留まる	しかばね／かばね
坐を正しくして【扣】えている	ひか
細行を【矜】しまずんば終に大徳を累せん	つつし
罪あるを罰し、虚なるを【訐】く	あば
雑木林に【尉鶲】の甲高い声が響く	じょうびたき
三世【爨】を一つにする	かまど
山に嘉き【卉】有り	くさ
山に喬松有り【隰】に游竜有り	さわ

山海その左を【扼】えたり	おさ
山高ければ木【脩】し	なが
山中には霜と露の【饒】く、風気もまた先に寒し	おお
四面遊目に足りて丘壑の富を【擅】にす	ほしいまま
子は温にして【厲】し	はげ
子孫世に伝え、福禄【疆】りなし	かぎ
志ある者は事【竟】に成る	つい
志を同じくする【儔】ではない	ともがら
指を以て沸けるを【撓】す	みだ
獅子【吼】ゆれば百獣脳裂く	ほ
私心【萌】さば立ち所に神罰を受けん	きざ
詩文に【絶】だ才有るを見る	はなは
事を論うに【諧】うときは、則ち事理自ら通う	かな
耳目に【嫺】わざるを以て排斥せり	なら
自ら【矜】らず、故に長たり	ほこ
実葛の根を【臼搗】いた	うすづ
社寺建立の縁起絵巻を【繙】く	ひもと
車を【篷】で蔽ってあった	とま
車甚だ沢あれば、人必ず【瘁】る	つか／やつ
若くして極官に【陞】った	のぼ
若手研究者の独創的な学説を【詆】る	そし
需は【孚】あり、おおい亨る	まこと
周に大いなる【賚】あり、善人是れ富めり	たまもの
秋風が吹き【簟】を巻いて片付ける	たかむしろ
衆を率いて行在に【扈】う	したが／つきそ
衆口は金を【鑠】かす	と
住み倦めば山に【遯】るる心安さもあるべし	のが／かく
春【徂】くやまごつく旅の五六日	ゆ
準優勝に【慊】らず再び挑んだ	あきた
書を学ぶは急流に【泝】るが如し	さかのぼ

書を著し十年を【逾】ゆる	こ
諸兇すでに去るに【暨】ぶ	およ
諸人を【屏】けて偶語する	しりぞ
将を斬り旗を【搴】る功有り	と
将軍と力を【勠】せて秦を攻めた	あわ
将軍の【麾】く所に一糸乱れず従う	さしまね
将軍の偉略により渠帥は【殪】れた	たお
将軍は【絳】の衣に身を裹んだ	あか
小人の過ちは必ず【文】る	かざ
尚武の風が【頽】れ廃れた	くず
沼の上を【田鳧】が鳴きながら飛んでいる	たげり
笑えども【諠】しからず	かまびす／やかま
上官への【諂】りや依怙贔屓に依って保っている	おもね
上流婦人も【跣】の装いで参会する	はだし
城上、行くこと【慵】し	ものう
場内は興奮の【堝】と化した	るつぼ
燭を【剪】り机上を明るくした	き
信を講じて睦を【脩】む	おさ
唇を【啖】い裂くほどに咬む	く
心を繋ぐ【轄】となる	くさび
心を【原】ねて罪を定む	たず
心を【悛】めて人の道を求める	あらた
心広く体【胖】かなり	ゆた
心中を目顔で【愬】えている	うった
深く【罩】める雨の奥に松が見える	こ
真っ赤になるくらいの【猥】ら話	みだ
神、人に【憑】って自身の来歴を述べる	よ／かか
身を卑くして伏し、以て【敖】ぶ者を候う	あそ
人【咸】埡に躓けども、山に躓くこと莫し	みな
人に【誨】えて倦まず	おし

人の【誚】りを顧みない	そし
人の性は善悪【渾】じる	ま
人を【貶】んだような態度をとる	さげす
人を事うるに道を【枉】ぐ	ま
人格任有り、【掌】ることみだれざるべし	つかさど
人神の和まことに【洽】し	あまね
人生は行楽のみ、富貴を【須】つもいずれの時ぞ	ま
人知らずして【慍】らず	いか
数騎【銜】を駢べ鞍上に相話す	くつわ
澄江静かなること【練】のごとし	ねりぎぬ
世を憂しと殆厭うて【緇門】に入る	くろかど
世人交わりを結ぶに黄金を【須】う	もち
政局に【艱】み酒色を縦にする	なや
政敵が【遽】しい動きを見せる	あわただ
星を【覘】って農時を知る	うかが
聖人は誉れを求めず誹りを【辟】けず	さ
聖人は芻蕘に【詢】る	はか
声音吁として【怕】る可し	おそ
西坂より山へ登る時は身を【欹】てて歩む	そばだ
逝く者は斯くの如きか、昼夜を【舎】かず	お
石の【鏃】が大量に出土した	やじり
石は玉を【韞】みて山輝く	つつ
石塔の前に【俯】しになって地面に横たわる	うつぶ
雪花、零落すること【絮】の如し	わた
舌端の【孽】い楚鉄より惨し	わざわ
川【壅】がりて潰えれば、人を傷つくること必ず多し	ふさ
川に沿って広い【磧】が続く	かわら
戦血地を染め、腥風草樹を【槁】らす	か
浅ましく老いさらばえた【尨】が現れた	むくいぬ
箭を射掛くるに些かも【踟】わず	ためら

善を嘉して不能を【矜】れむ	あわ
善行蒼穹を【挌】ち天福を以て之に報ゆ	う
善賈を求めて諸を【沽】らんか	う
全身を【顫】わして後退りする	ふる
曽て一度水を【哈】って甘苦を知る	すす
楚の【羸】きは、それ我を誘うなり	よわ
早歳那ぞ知らん世事の【艱】きを	かた
相【嚮】かいて哭し、皆声を失う	む
相手を【詈】る	ののし
窓框の木材が露で【涵】う	うるお
草藜【闢】け田疇治まる	ひら
蔵を慢るは盗を【誨】う	おし
足下のなした赤壁の大功を【顕】す	あらわ
俗を斉え弊を【拯】い民嘉せざるなし	すく
卒に越を赦し、兵を【罷】めて帰る	や
其の【倨】らんより寧ろ句なれ	おご
存する者は且く生を【偸】む	ぬす
他人の助を藉ることを【允】さず	ゆる
怠ることなく、【懋】めて大命を建てよ	つと
大きな人声、足音【抔】が聞こえた	など
大姦の去ること【距】の斯にぬくるがごとし	けづめ
大車も【軛】無ければ進まず	くびき
大道は甚だ【夷】らかなり	たい
沢を【竭】くし藪を焚く	つ
只只【惘】れるばかりである	あき
知らないうちに【痂】が落ちた	かさぶた
地を画して【趨】る	はし
地を鑿ちて樽とし、手を以て【抔】いて飲む	すく
竹の筒を縄で【縢】げる	から
着古して衣服の色が【褪】める	さ

忠臣孝子が一門に【萃】まる	あつ
昼は烽を挙げ、夜は燧を【燔】く	や
柱に【靠】りかかって立つ	よ
長い月日の病苦に【嘖】まれる	さいな
直きを挙げてこれをまがれるに【錯】けば則ち民服せん	お
直言讜議（とうぎ）、【諱】まず憚らず	い
蔦や【槭】が茂る山道に分け入った	かえで
釣果を【糶】にかける	せり
帝の【冑】の傅育にあたる	よつぎ
帝予に良弼を【賚】うを夢む	たま
庭に【梛筏】を植栽する	なぎいかだ
鼎を武蔵の地に【奠】む	さだ
天の暦数、爾の【躬】に在り	み
天は闊く地は【遐】かなり	はる
天を怨まず、人を【尤】めず	とが
天井の大きな【桷】は燻っていた	たるき
天魔の【号】びか風雨激し	さけ
土が水を【渾】している	にご
土を耕し、植え、【耘】り、収穫する	くさぎ
刀の【鋩】を喉元に擬する	きっさき
盗人に【鑰】を預ける	かぎ
当て事と【畚褌】は向こうから外れる	もっこふんどし
動もすれば旬日に【弥】る	わた
堂に【怡】ぶ燕雀、後災を知らず	よろこ
堂内に妖気が【漾】う	ただよ
導師先ず【躬】ら身を捐つる	みずか
洞庭【濬】しと雖も之を負む者は北（やぶ）る	ふか
南山の寿の如く、【騫】けず崩れず	か
南山を【錮】ぐと雖も猶隙有り	ふさ
難に臨んで【遽】かに兵を鋳る	にわ

難事業に全然の【績】を収め得る	いさお
二月新糸を売り、五月新穀を【糶】る	う
二十台の【犬橇】が氷原を走り始めた	いぬそり／いぬぞり
二十六日黄昏に至って稿を【畢】う	お
二女曰く、【兪】り、往きたまえ、と	しか
日【仄】きて乃ち罷む	かたむ
日【闌】けて起き出した	た
日は【昃】きて陰を停むる無し	かたむ
日を重ね月を【踰】え遠国まで旅を続けた	こ
日本画の絵絹に【絖】を用いる	ぬめ
年寒くして松柏の【凋】むに後るるを知る	しぼ
年寄りの言うことと牛の【鞦】は外れたことがない	しりがい
馬を【絆】ぎ留めて行かしめぬ	つな
馬歯【蚤】くも桑年に垂とす	はや
梅の花が【馥】しい	かんば
梅をして海棠を【聘】らしむ	めと
煤けた【龕】の中から念持仏が見つかった	ずし
博く其の可否を【詢】わんとす	と
白い霧の【帷】に包まれた	とばり
白頭にしてまた辺境を【戍】る	まも
白浪天を【掀】げ尽日風吹く	あ／かか
肌肉は充ち皮膚は【緻】かなり	こま
八たび戦い八たび【剋】つ	か
発酵した【醪】醤油を漉す	もろみ
彼の頬を【擲】りつけた	なぐ
彼の【拇】は太くて長い	おやゆび
被を以て面を【韜】す	かく
尾大【掉】わざるの憾みがある	ふる
眉を【攅】め月に向かいて憂う	あつ
眉目秀麗、凛として【狃】るべからず	な

美衣を購うに【嗇】かならず	やぶさ
美膳を知らぬを【愍】れむ	あわ
鼻の長さ【七咫】、背（そびら）の長さ七尺余りあり	ななあた／ななた
匹夫匹婦の【諒】をなす	まこと
筆の大きさ【椽】のごとし	たるき
百千鳥【髪梳】く女肌ぬぎに	かみす
百足の虫、断てども【蹶】れず	たお
百足の虫は死に至るも【僵】れず	たお
百目の聞見する所を【殫】くす	つ
氷上の穴より【罟】を入る	あみ
苗の【莠】有るが若し	はぐさ
貧賤にして世を軽んじ志を【肆】にせん	ほしいまま
不虞に備えずんば、以て【師】すべからず	いくさ
不調法者の【楫取】りに吝かでない	かじと
付近の浜に【赤鰾】が打ち上げられていた	あかえい
夫の懶惰をヒステリックに【毀】る	そし
夫子立ちて天下治まるに我なお【尸】る	つかさど
夫婦【驩】ばざるを得ず	よろこ
富商大利を【牟】る所なし	むさぼ
父無ければ何をか【怙】まん	たの
風は【恬】らかで浪は静かだ	やす
福いは【眥】に盈たず、禍いは世に溢る	まなじり
福は【徼】むべからず	もと
腹をゆするような【太棹】の音	ふとざお
覆轍を鑑みず今にして【窘】しむ	くる
物言えば乃ち【雍】らぐ	やわ
文と質と相適均して甚だ【斌】し	うるわ
文中に人の心弦を【扣】くものがあった	たた
聞きて【僉】歓喜せり	みな
兵を【犒】うために現地に赴いた	ねぎら

兵を【厲】いで馬に秣う	と
平に処れば則ち【恬】かなるは、水の性なり	しず
米を【糴】い、薪を積む	か
片言、獄を【折】む	さだ
母無ければ何をか【恃】まん	たの
法正しければ則ち民【愨】む	つつし
亡母遺愛の【手匣】である	てばこ
謀【泄】るれば事に功なし	も
幕を【撥】げて場内を一瞥した	かか
末代までの【譬】え種になった	たと
万機を【攬】るに堪えず深く自ら愧ず	と
万葉集の名歌を【鈔】す	うつ
民のいまだ【贍】らざるを哀れむ	た
無間の【槍衾】を駆ける	やりぶすま
無数の恩恵を後人に【貽】る	おく
名は以て中人を【厲】ますべし	はげ
名士の急逝が世人を【駭】かした	おどろ
名勝りて質【孱】し	よわ
明主は【濫】りにその臣を富貴にせず	みだ
牝鳥の羽の間から雛の頭が【覘】いた	のぞ
猛き鷲は日辺に到らずしてその翼を【折】けり	くじ
木鐸を以て路に【徇】う	とな
木綿もの打ても名には【碪】哉	きぬた
木斛の木を食う【蠹】	きくいむし
目を遊ばす懐いを【騁】する所以なり	は
尤めを忍び【詬】を攘う	はじ
夜、戎衣を【擣】ちて明月に向かう	う
夜な夜なねぶりを【魘】いつる物ありけり	おそ
夜の【幄】がおりる	とばり
勇を好みて貧しきを【疾】むは乱る	にく

友と酒を酌み交わし【燕】ぐ	くつろ
友を集め一宵の酒を【斟】むこと久し	く
有為の奥山、路【嶮】し	けわ
有虞氏は徳を貴び【歯】を尚ぶ	よわい
有司は【畢】く朝に立つ	ことごと
予定外の【需】めにそなえる	もと
予乃の徳を【懋】んにす	さか
幼なれども【肯】えて長に事えず	あ
幼児には常に【誑】くこと毋きを視す	あざむ
幼帝を【簇】がり擁る	むら
妖夫曳きて【衒】り、何ぞ市に号ぶ	う
容貌を【貶】られる謂われはない	そし
羊性淫にして【很】る	もと
羊百草を【齧】み、鶏五穀を啄む	か
遥かに瀑布の前川に【挂】かるを看る	か
陽炎が立ち、【土熱】れの上がる猛暑日	つちいき
頼政がはね箸したり【菰粽】	こもちまき
落花流水、【太】だ茫然たり	はなは
乱を【撥】め正に反す	おさ
糧を【贏】してこれに趣く	あま
領主は【恣】な生活を送った	ほしいまま
烈士は名に【徇】う	したが
烈風で【檣】が折れてしまった	ほばしら
恋の上荷を【撥】ねる	は
連山湖面に影を【涵】して静まっている	ひた
労多くして日既に【旰】る	く
老軀を【挈】げて御前試合に臨む	ひっさ
老子を【孚】みしものは当時の社会なり	はぐく
老先生鏡を覗き【鑷】を取り出ず	けぬき
和を以て貴しとなし【忤】うることなきを宗とせよ	さから

僮僕歓び迎え、稚子門に【候】つ	ま
冢を【発】いて遺恨をはらす	あば
叺を卸して【秣】を宛がった	まぐさ
哭声直上して雲霄を【干】す	おか
哺乳類にも【蹼】をもつものがある	みずかき
莘莘として民を【恤】みたもう	めぐ
尸禄殃を【貽】し負乗悔を招く	のこ
彝倫の道、既に民に【浹】し	あまね
悵然としてピアノに【倚】れり	よ
慵い【憊】れの翳を容姿に見せる	つか
懺悔もし【竟】われば すなわち怡悦す	お
搦め手を【擣】いて陥れる	つ
杳として【繹】ぬべからず	たず
晨露晞きて草【馥】る	かお
朧に薄紅の螺鈿を【鐫】る	ほ／え
歉らぬ思いは【揩】うべくもない	ぬぐ
汨水の【頭】に立ち来し方行く末を惟う	ほとり
涅すれども【緇】まず	くろ
澆季の政、外患【荐】りに迫る	しき
焉んぞ殫く【籌】るべけんや	はか
燧を【鑽】りて火を改む	き
甎を【抛】げて玉を引く	な
羈旅の【羸】れたる人に親しまん	つか
膠漆相【賊】ない、氷炭相憩う	そこ
臂を捲り【臀】を絡げて立ち働く	しり
藐藐たる昊天克く【鞏】からざる無し	かた
藜の【嫩葉】を食用にする	わかば
蝨を【捫】りつぶして当世の務めを談ず	ひね
襦袢の袖振るや【嬌】かしき	なまめ
詭詐多きを以て深く其の人と為りを【鄙】しむ	いや

輻が轂に【輳】まる	あつ
逞しい【肉叢】が汗で光っている	ししむら
饑饉【仍】ねて臻る	かさ
髻に【綰】べ庭隅に下る	す
魴魚頽尾、王室【燬】くが如し	や
◆３ 觥籌こもごも【錯】じる	ま
【花薄】あまりまねけばうら枯れて	はなすすき
【解】し織りの銘仙が一世を風靡した	ほぐ
【幾】しを知るは、其れ神か	きざ
【向】には括り、今や髪を被る	さき
【女寡】に花が咲く	おんなやもめ
【少】く両人は睨み合っていた	しばら
【双肌】を脱いで太い撥を握った	もろはだ
【逮】えられて将に戮せられんとす	とら
いと歯痒くて心【苛】つなるべし	いら
その源は以て觴を【濫】かぶべし	う
その像を【肖】りて之に事う	かたど
その輪奐の美を【討】ねて殿堂を廻る	たず
ただ功徳の為に幾梓と糸を【績】ぐ	つむ
ひとえ【四片】の白蓮華	よひら
一切の【罪科】もない人間を縄に掛ける	つみとが
一斗を過ぎざるに【径】ちに酔いたり	ただ
一日の敵を【縦】すは、数世の患いなり	ゆる
一觴一詠、【漢才】殊に穎れる	からざえ
雨の流れたるを凄まじき瀑と【錯】りけるなり	あやま
燕王【幾】ど死して幸いに逃る	ほとん
遠人と【接】わるに礼を以てす	まじ
何ぞ久しく天下の士を【稽】むるに足らんや	とど
何も言わずに【肯】いた	うなず
価を【諧】えて然るのち、去るを得	ととの

家を【主】り賓客を待たしむ	つかさど
禍故重畳し、凶問【累】りに集る	しき
我【親】ら千人の垢を去らん	みずか
皆国事を以て君を【累】わす	わずら
寒暄の辞を【陳】べる	の
寛を以て猛を【済】い、猛を以て寛を済う	すく
漢才【詣】りたる翁ども	いた
翰墨を以て自ら【娯】しむ	たの
奇策が対抗馬の力を【殺】いだ	そ
既に聞き【陳】した迂説である	ふる
久闊の情を【叙】べる	の
郷党には歯を【尚】ぶ	たっと／とうと
業を【創】め統を垂る	はじ
錦を衣て絅を【尚】う	くわ
金人金幣を【須】むるに千万を以て計す	もと
九層の【台】は累土より起こる	うてな
苦汁を【咽】んだような渋っ面	の
愚民の上に【苛】き政府あり	から／むご
君子の道は、端を夫婦に【造】す	な
君腥を賜えば必ず【熟】て之を薦む	に
軽く頬が【熱】るまで火を熾した	ほて
見上げし母の目は漸く娘に【転】りぬ	うつ
古より国家の禍いは小人に【造】まる	はじ
枯を摧き朽を【拉】く	くだ
吾、子を【距】ぐ所以を知る	ふせ
巧言を弄し世を瞞き、名を【干】め利を射る	もと
国には【造】があり、県には首（かばね）がある	みやつこ
財を悉くして其の口を【弥】う	つくろ
榊と【紙垂】を通した玉串	かみしで
山を出でて故人の家に【舎】す	やど

四瀆を撃汰して【杭】る	わた
四時【迭】いに起こり、万物循いて生ず	たが
疾く録すに字を【爽】えず	たが
酒次第に廻りて、席漸く【濫】る	みだ
舟を同じくして江を【済】る	わた
衆介皆命を【逆】えて辞せず	むか
十人を【将】い、往き掘りてその金を得	ひき
俊を【非】り傑を疑う	そし
諸王また【率】ね驕逸不法なり	おおむ
諸色の挙選、且く【権】に停むべし	かり
色荒を以て君を【誘】くまじ	おび
深海の底のように文目も【弁】かぬ真暗闇	わ
神の【標野】を犯す事を忌む	しめの
臣の明の能く【逆】め睹る所に非ず	あらかじ
身分に【距】たりのある男女の恋	へだ
進退ここに【谷】まる	きわ
人の短を【道】うなかれ、己の長を説くなかれ	い
人形の好醜、延寿に【逮】ばず	およ
錐刀を以て太山を【堕】たんとす	こぼ
世に【双】ぶ者のない穎才である	なら
世の飢饉に【値】い、貧窮して衣食に困しむ	あ
聖人要を執れば、四方来たりて【効】す	いた
先王の大物を【班】かつ	わ
先哲に【率】わず酒に荒耽す	したが
遷客騒人多く于に【会】まる	あつ
前帝の【禅】りを受けて南面の徳を治む	ゆず
前門に虎を【拒】いで後門に狼を進む	ふせ
早く永約を【訂】む	さだ
太守の襟韻【苦】だ超越す	はなは
太平洋を【絶】りて北米桑港に往く	わた

大かた【生熟】れの悪人なり	なまな
調べ高うして知音【少】なり	まれ
追戎は恪無く、窮寇は【格】たず	う
鍔迫り合いでお互い【創】を被った	きず
天に【法】るは天地を治むるの道なり	のっと
天下の道あれば、道を以て身に【殉】わしむ	したが
天頻りに異を見し、地【数】震動す	しばしば
伝聞何ぞ【尽】く信ずべけんや	ことごと
党輩を【原】して平民と為す	ゆる
唐堯位を【遜】るも虞舜は怡ばず	ゆず
頭を【低】れ故郷を思う	た
道術を【展】べて政あるに施す	の
之を斉うるに礼を以てすれば恥有りて且つ【格】し	ただ
之を民に【暴】わして民も之を受けたり	あら
髪を攫んで【拉】き倒す	ひ
彼の寂寥に【肖】た面影を持つ人	に
彼方と此方とを【権】り比べる	はか
美酒佳肴が所狭しと【陳】なる	つら
貧人富みを致し、老人【少】きに還らむ	わか
斧や鎌を揮って六【片】分働く	ぺんす
武王人をして殷を【候】わしむ	うかが
物に【格】りて知を致す	いた
兵を【縦】ちて殺戮せしむること五日間なりき	はな
凡そ染は春に【暴】し練る	さら
毎に彼の隆準を【調】る	あざけ
毎日十里【宛】行軍した	ずつ
万金を【資】けて東のかた韓魏に遊ばしむ	たす
務めて自ら矯厲し、【雅】に清談を尚ぶ	つね
無恙を駕し且つ儂（わ）が春衣を【美】む	ほ
容姿ことごとく【暴】らかなり	あら

流民の【蒸】くして癘疫を為さん	おお
令を下して師を【班】す	かえ
礼楽を【説】び詩書を敦くす	よろこ
労して【罷】れ死して転（す）てらる	つか
俛焉として孳孳たるあり、斃れて【后】已む	のち
厥の佚を【淫】にし、天及び民の従うとを顧みず	ほしいまま
夸者は権に死し、品庶は生を【毎】る	むさぼ
烽火岡巒を【被】う	おお
蒹葭斥土に【弥】し	あまね
薑を【撤】てずして食らう	す
蝙蝠傘を【展】げたような雪の山	ひろ
褌を【緊】めて掛かる	し
驍名を謳われる【健】か者なり	したた
鷙鳥百を【累】ぬとも一鶚に如かず	かさ
◆４ 鱓を【熬】って煮染めを重詰めにする	い
屏風を【摺】み、門扇を開く	たた
頬落ち【顴】出でて長鬚生う	ほおぼね
駃騠（けってい）は、その母の腹を【刳】いて生まる	さ
薄（いささ）か我が衣を【澣】う	あら
【梲】を揮いて狗を呼ぶ	つえ
【苦艾】と酒精の匂いがした	にがよもぎ
【儘】く俘にする所の士民を以て奴と為す	ことごと
【吁】、君何ぞ見ることの晩きや	ああ
【嫂】水に溺るとも手を取ってあげず	あによめ
【幃】を搴げて内を窺う	とばり
【徇】らすに離宮別寝を以てし、承くるに崇台間館を以てす	めぐ
【徭】を重くして賦を苛しくする	えだち
【敖】りは長ずべからず、欲は縦にすべからず	おご
【曷】んぞ以て七尺の軀を美しとするに足らんや	いずく
【枴】をついて天子に謁す	つえ

【枹】を揚げて鼓を拊つ	ばち
【槎】に乗って東の海に遊ばん	いかだ
【澹】かなること其れ海の若し	しず
【痿】えたる腕を揮わんと欲す	な
【縹緘】の三鍬形兜を調達する	はなだおどし
【苟】に日に新たにせば、日日に新たに、また日に新たなり	まこと
【詢】に陛下の叡旨の在る所なり	まこと
【賤】が伏せ屋に月もさす	しず
【鎰】の穴から天を覗く	かぎ
ここに人有り山の【阿】に、薜荔を被て女羅を帯とす	くま
この歳に書を【刱】めて梓に上す	はじ
これを外戚に【譬】し五臓に刻せんとす	さと
その城に钁して【坎】を為る	あな
みな【捶】ち懲らすべき科なり	むちう／う
みな游覧し、【暝】れて宿に投ず	く
或いは十有八尺にして【贏】び、或いは十有三尺にして縮まる	の
胃充つれば即ち中大いに【懣】ゆ	もだ
一たび【晤】えば酬酢して日も旰る	あ
一節の詩には光明透徹して一点の【翳】あらしむべからず	かげ
允に厥の徳を【迪】む	ふ
鋭い【鴃】の鳴き声が空に響く	もず
於転婆娘のお【傅】に手を焼く	もり
翁は【儼】かに僮僕に命じた	おごそ
何を【恙】えて已まざるか	うれ
伽藍を建てて美迹を【旌】す	あらわ
価を誇り技巧に【傲】る	おご
嘉き名普く【暨】り、衆に欽仰せられむ	いた
夏は多く薪を積み、冬は則ち之を【煬】く	や
河漢の【冱】れども寒（こご）えしむる能はず	こお
河中より【箆撓】め形に押し流される	のた／のだ

火鉢の前に蹲踞して手を【煬】る	あぶ
花、紅にしてまた来たりて【覿】わん	あ
我が覃耜を以て載を南畝に【俶】む	はじ
我また【奚】をか覓めん	なに
画に出来ない情を【咏】う	うた
海は万水を【涵】れ、春は万物を育む	い
海図波濤に【拆】け、旧繡移りて曲折す	さ
海内戎服久しくして朝廷【晏】らかなり	やす
開けて見たよりも【慥】かだ	たし
葛の【覃】びて中谷に施（うつ）る	の
褐寛博と雖も吾【惴】れざらんや	おそ
敢えて弓を【彎】きて怨みに報いず	ひ
汗流れて背を【浹】す	うるお／とお
竿を肩にし【畚】を手にする釣客である	ふご
眼【暈】むに夜書多し	くら
顔色は衰え、目縁は【黝】ずんでいた	くろ
器無きも民前に【滔】まる	あつ
鬼も十八【屁屎葛】も花盛り	へくそかずら
杵頭降りて米穀【搗】けるなり	つ
玉石同じ【匱】に在り	ひつ／はこ
玉石同じく【糅】え、一概にして相量る	まじ
禁裏御用の商人たちが【掾】の名乗りを暖簾に掲げる	じょう
禽離れ獣【迸】る	はし
桑門俗を【蠹】なう	そこ
君に事え三たび違るも【竟】を出でず	さかい
軽舟川を【竟】り、江に傍い浦に依る	わた
血を【瀝】ぎて以て辞を書す	そそ
月落ち烏【啼】いて霜天に満つ	な
言を【纉】めて以て文をなす	あつ
古文を【撥】き詩書を焚く	のぞ

虎を暴（う）ち河を【馮】る	かちわた
五疋の【騾】を曳いて来た	らば
吾が車に膏し、吾が馬に【秣】う	まぐさか
御殿のあった【城址】は草が長じていた	しろあと
公子の【紿】くことを悪む	あざむ
公子商人は【驟】国に施す	しばしば
孝弟を【趨】し、時を以て順脩す	うなが
工なりと雖も【窘】る	せま
江碧にして鳥は【逾】白し	いよいよ
溝渠を【濬】えて川にいたる	さら
溝洫を【仞】り土方を物（み）る	はか
皇帝を【詒】き万金を貪る	あざむ
行色【黯】くして秋将に暮れんとす	くら
合図の【燧】が太虚へ上がる	のろし
国破れて心【仍】在り	なお
腰を【跼】めて恐る恐る近寄った	かが
今日まで【噫】にも出さずにいた	おくび
沙丘鉅鹿を去ること【斂】三百里	ほぼ
坐すること【尸】の如し、立つこと斉の如し	かたしろ
座上の【籌】紛錯として漸く杯盤狼藉となる	かずとり
才美後世に揚ぐ、【亶】に其れ然らんや	まこと
歳七十に垂としてその背【傴】まる	かが
細鱗群して水を【抒】み、其の胡を満たす	く
財貨を【邀】めず、ただ風流を慕う	もと
鷺のように足を【蹻】げては踏み込む	あ
昨日は【孀】、今日は姑	やもめ
鮭鱒の【鯡】を一腹戴いた	はららご／はらご
仔馬が【槲】の木蔭に身を寄せる	かしわ
四体をして寒暑の変に【狃】わしむ	なら
士大夫の戦うこと甚だ苦しきを【閔】れむ	あわ

子【奚】ぞ政を為さざる	なん
思いを【覃】めて以て業を終えんとす	ふか
指を以て之を【揩】る	こす／す
死者は【殯】して屋内に在り	かりもがり
詩人を【聘】して法律を作らしめた	め
寺にて茶を乞い【餉笥】を開く	かれいけ
時令も乖き【狠】れるが如し	もと
自ら其の処を【爰】う	か
自然を説いて微を【拆】く	ひら
邪説を【闢】け壬人を難（はば）む	しりぞ
主臣の労を憂う、孰か祗み【懍】れざらん	おそ
手足【痿】れて起居ままならぬ	しび
手薬煉引いて【睨】め付けている	ね
秋の田の穂なみかがやく【百篝】	ももかがり
秋蘭を【紉】ぎて以て佩と為す	つな
終わり令くするに【俶】き有り	よ
重使を発して【媾】を為すに如かず	よしみ
叔向、子産に書を【詒】らしむ	おく
春の日に【廂】をかける	ひさし
旬日【畋】りして帰らず	か
諸侯の兵【竭】く至る	ことごと
諸将尽く【讙】し	かまびす
女の髪を陽の阿に【晞】かす	かわ
小人議を【沮】むを以て衆を出ず	はば
床の間から【狆潜】りへ足を掛けた	ちんくぐ
城廓の【角櫓】に上り万里を望む	すみやぐら
城門【噎】がり関するを得ず	ふさ
常に雲母紙で面を【屏】う	おお
色厲しくして内【荏】らかなり	やわ
信なる彼の南山、維れ禹之を【甸】む	おさ

心を【捫】でて自ら問う	な
臣社稷の削弱を【閔】う	うれ
親ら聖筆を【紆】らして碑文を為る	めぐ
身もまた稷契の列に【廁】じらんと欲す	ま
身を滄浪に【澡】う	あら
身体は【羸】せて疥瘡を生ず	や
人は栄えて【恁】かる景色の俤がなくなろうとする	か
人を【尹】め辟を祗むとに暇あらず	おさ
人民、生を【聊】しまず	たの
水【蹙】れば魚いよいよ躍る	せま
水の【瀝】りが咽喉を潤した	したた
崇臺独り出でて【崛】ち、峻秀たる北極に至る	そばだ
頗る【儼】しい八字髭の大男	いかめ
世の人々の御主よ、われをも【拯】け給え	たす
斉整として【藺莚】の上に坐す	いむしろ
石上に出づる泉は大旱に【竭】れず	か
先王の緒を【纘】ぎて天下を有てり	つ
千里を【跌】つを覚ゆるものか	あやま
専ら曩の構造を【摸】して差わない	うつ
戦わずして【耘】くより大なるは莫し	のぞ
泉を【雍】ぐ毋れ、羅を訖む毋れ	ふさ
泉を雍ぐ毋れ、羅を【訖】む毋れ	や
禅僧に【旛】動きけり春の風	はた
楚人固く先ず【歃】ることを請う	すす
鼠盗の【夥】を執えて戮さんとす	なかま
草萊を【辟】き、土地を任ず	ひら
霜雪交々下り、川池暴かに【沍】る	こお
足を以て路馬の芻を【蹙】れば、誅あり	け
足を重ね目を【仄】つ	そばだ
袖を巻き裳を【搴】げて箒を持つ	かか

孫王諸人色みな【遽】つ	あわ
村の附近に古刹の【墟】あり	あと
泰山【厲】の如し、黄河帯の如し	といし
大きな西瓜を一つ【饋】る	おく
大学の【允】、太だ賢し	じょう
大空に雲は【飄】い、潮分けて舟は行くなり	ただよ
大君の御令（みこと）畏み、天離る【鄙辺】に罷る	ひなべ
大湖を【匯】らし谿澗を作す	めぐ
大壑と沃焦とに【淙】ぐ	そそ
炭の【賤】きを憂え、天の寒きを願う	やす
地利を【壙】しくする毋れ	むな
朝夕我が眼を【礙】ぐ	さまた
長男の【娵】にと懇望された	よめ
珍羞を【陶坏】に堆く盛る	すえつき
天は玉斗を廻らして地を【暝】くする	くら
天狗と羽を【幷】べて象外に遊ぶ	なら
天子、春秋【鼎】に盛んなり	まさ
天誅を加えて橋上に【梟】す	さら
兎を得て【蹄】を忘る	わな
屠人是を調えて其の【胙】を東宮に奉る	ひもろぎ
土竜を【杁】の先で突く	おうご／おうこ
冬の雪中は【橇】を穿きて途を行く	かんじき
冬は則ち穴に宿り、夏は則ち【樔】に住む	す
冬枯れで【暈取】られた寒林	くまど
刀を引き自ら【剄】る	くびき
唐銅の【餌畚】を秘蔵している	えふご
東暾淡く未だ【熹】んならず	さか
頭を以て地を【搶】く	つ
突然の【黒框】葉書で胸騒ぎがする	くろわく
二松を対樹し、日に其の間に【哦】う	うた

日が西に【舂】き始める	うすづ
日の影に猫の【抓】き出す独活芽かな	か
日辺より来れるに逢うを【忻】ぶ	よろこ
年二十八にして始めて【宦】う	つか
之を毀てば則ち朝にして【堋】る	ほうむ
蚤く寝て【晏】く起きる	おそ
杯の酒の余った【瀝】まで飲み尽くす	しずく
白き汗衫を【鬆】やかに身に纏う	ゆる
番兵を欺き塘池を【泅】ぎて人屋に入る	およ
皮の存せざる、毛将安にか【傅】かん	つ
備え無くして官弁せん者は、なお【瀋】を拾うがごとし	しる
琵琶を鼓して以て飲を【侑】む	すす
氷を【鏤】るような文章	え
貧窮を【贍】い賢能を禄す	すく
父兄の烈に【仗】りて割拠せり	よ
武王大義を天下に【倡】う	とな
武王邇きに【泄】れず、遠きを忘れず	な
風呂敷から夏蜜柑が【輾】げ出した	ころ
伏見の事万一【蹶】かば嘯聚賊となれ	つまず
物を【殄】ち民を害なう	た
物下なるも【估】高し	あたい
憤りを発して以て情を【抒】ぶ	の
文を売り、酒を【沽】う	か
文を舞わし巧みに【詆】う	し
聞いても毫も【咢】くことなし	おどろ
別墅を【搆】えて其の苑に花卉を植う	かま
歩兵軍後に【踵】ぐもの数十万人	つ
暮れ【夙】星の輝く枯れ野かな	まだき
萌えては朽ち、絶えては【孽】す	ひこばえ
本に背きて末に【趨】く	おもむ

凡そ設色する者は【已】だ動植に逼れり	はなは
麻姑を【倩】うて痒きを掻く	やと
漫ろに春衣を脱いで酒紅を【浣】う	あら
未だ其の義を【竟】むる能わず	きわ
蓑を披（き）て火を救い、瀆を【毀】りて水を止む	やぶ
民【殷】く国富むも存恤を知らず	おお
夢を謫して意なお【恟】る	おそ
命を鯨鯢の【腮】に懸く	あぎと
鳴鶴空林に【聒】し	かまびす
門に【踵】りて文公に告ぐ	いた
門の【廡】に扁額が掛かっていた	ひさし
門を【噤】じて啓くなきことあり	と
野人礼に【嫻】わず、妄りに猥雑の言を弄す	なら
憂心悄悄として群小に【慍】まる	うら
予これを用て天に【閔】めて民に越（ひろ）む	つと
予を翼け、以て【于】きて弭定す	ゆ
雷雨に因って以て恩を【覃】く	ひ
落葉が為す【飯櫃形】の褥である	いびつなり／いいびつなり
吏民車を【攀】きて之を請う	ひ
流芳未だ【歇】くるに及ばず	つ
竜を【擾】らすを名手に学ぶ	な
糧を【贏】いて景従す	にな
麗しく【冱】えたる空	さ
連りに公府に【辟】さるるも就かず	め
炉端の【燠掻】きを手にする	おきか
老に漸（いた）るも一第すらなお未だ【叨】らず	むさぼ
侈れば則ち【匱】しきを恤わず	とぼ
厥の孫謀を【詒】し、以て翼子を燕（やす）んず	のこ
嚮かえば則ち順わず、背けば則ち之を【謾】る	あなど／そし
夬夬として叛いて還た【遘】えり	あ

夸者は権に死し、衆庶は生を【馮】む	たの
婢、【愨】を竭くして香を焚く	まこと
帷の屋を設け【幔】を引き廻らす	まく
慷慨の意が心に熟み【靡】れていた	ただ
攀援して登り、箕踞して【遨】ぶ	あそ
旱魃苗死し民【厲】む	や
枌楡の砌を【尸所】とす	かばねどころ
焉んぞ【殫】く籌るべけんや	ことごと
眇眇として孤舟逝き、綿綿として帰思【紆】う	まと
竈馬のふつづかに【喞】くあるのみ	な
筵を【肆】ね席を設く	つら
絳侯皇帝の璽を【綰】ぐ	つな
罔罟を為し、以て【佃】り以て漁る	か
羌虜叛きて蜀漢を【鈔】む	かす
臂の【痹】れが久しく息まなかった	しび
藜を蒸し黍を炊き、東の畑に【餉】る	おく
蘋香る蘆の影、路は【彎】がり環る	ま
蚌合わせて其の喙を【拑】む	はさ
蟒蛇が【顋】を開いたような洞穴	あぎと／あご
諫めに【愎】りて勝つことを好む	もと
讒口に係り越後に【謫】される	なが
谿陜き者は速やかに【涸】る	か
賈いて【贏】けんと欲す	もう
跫音近づきて何者か来たると【俔】いぬ	うかが
閔いに【覯】うこと既に多く、侮りを受くること少なからず	あ
闡く天下を【幷】す	あわ
霙が【小歇】みなく降りしきっていた	こや
藹長けた顔には哀愁の【翳】りがあった	かげ
◆５ 【往】を慕わず、来を閔えず	いにしえ
【玉桙】の道は遠けどはしきやし	たまぼこ／たまほこ

【嵒】に立つの一条に思いを凝らす	いわ／いわお
維れ此の良人、求めず【迪】まず	すす
宜しく素を蓄えて以て中を【弸】たす	み
魚の【炙】きたるを嗜好す	や
四尺の屏風の【中褻】れたる立てたり	なかな
酒の醸造には【糵】を用いる	こうじ
石を鐫り蚌を【拌】き、市に伝売す	さ
泉香ばしくして酒【洌】し	きよ
調子を【低低】として謡うべし	ひきひき
陪臣【掫】りして淫者を弑す	よまわ
白を【鑷】きて坐ろに相看る	ぬ
煩悶を口癖にして【惓】むことを知らない	う
彼の風に【遡】かい、また孔だ之優（あい）するが如し	む
門地の【們】神使を務む	ともがら
廊廟に【荐】書を上る	しばしば
倭人は【很】だ死を懼れず	はなは
丕顕の謨は後人を【侑】けて欠くること無し	たす
烟が椿の【弁】と蕊に絡まる	はなびら
綺語の戯れも御意に【恊】う	かな